

救命外傷センターって何？ ～救命救急センターとどこがちがうの？～

自治医科大学 救急医学講座
准教授 松村 福広

「救命外傷センター」という言葉を聞いて、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。救命外傷センターという名称は聞きなれないかもしれませんが、”救命センター“という名称であれば映画やテレビドラマなどで耳にしたことがあると思います。「コード・ブルー」「TOKYO MER～走る緊急救命室」「救命病棟 24 時」など救命センターを舞台にした人気作品はたくさんあり、見たことがある人も多いのではないのでしょうか。このようなエンターテインメントのお陰もあり”救命センター“の認知度は高くなっていると考えられますが、皆さんが抱く救命センターのイメージはどのようなもののでしょうか？「ひどい病気や大怪我の患者さんが救急車で運ばれてきて、大病院の特別な設備の中でたくさんの医師や看護師が集中的に治療するところ」、といった感じでしょうか。このイメージで大きな間違いはないと思います。救命センターで中心となって診療に当たる医師は”救急医“で、先に挙げた映画やドラマの中心人物も救急医がほとんどです。救命センターでは救急医ができるだけ早く的確に診断し治療を開始するのですが、実際のところは患者さんの病気や怪我の状態が複雑なこともあるため（赤ちゃんから高齢の方まで様々な患者さんが搬送されます）、内科、外科、麻酔科、脳外科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻科、口腔外科、皮膚科など大変多

くの専門家の医師たちが、チームとして協力して患者さんを”救命“し”治療“していくことも少なくありません。

一方最近では”外傷センター“という名称も聞くことがあるかもしれません。これは”外傷“という名前の通り、外傷（怪我をした）患者さんを治療するところです。よって対象となる患者さんは交通事故や高いところから落ちたりして怪我をした方が中心になります。歴史的にみますと欧米では 60 年以上も前から、このような外傷患者さんを集中して治療する外傷センターが作られ、素晴らしい成果を残してきています。日本でも同じころから救命センターが設立され制度化が進み、欧米で設立されてきた外傷センターとしての役割も救命センターの中で果たしてきました。そして増え続けていた交通事故死亡者に対応し大きく貢献してきました。その後は救命センターの力だけでなく、自動車の安全性が向上し道路交通法規が整備されたことも重なり交通事故死亡者数は減少してきました。交通事故の数そのものも減ってはいるのですが、数自体は 2000 年以前とそれほど大きな違いはありません。つまり重症の外傷であっても生命を取り留める可能性が高くなってきたのです。これは大変すばらしいことですが、一方で重症の怪我をした患者さんは失った身体機能によりその生活は大きく変わってしまいます。この問題を解決するためには命を救うだけでなく、大怪我の患者さんの後遺症を減らしてできるだけ元の状態に近い身体機能に回復させることが重要になってくるのです。具体的にはヘリコプターや救急車で短時間に患者さんを搬送することが必要ですし、外傷治療を専門としたチーム医療で効率よく治療を進めていくことが必要になります。こういった従来の救命セン

ターとは役割が異なる外傷センターを設立する動きはアジアの諸外国でも欧米に倣い一般的になっています。ただし日本では残念なことなのですが、外傷センターを併設する施設が少しずつ増えてきてはいるものの絶対数は少なく、その多くは整形外科を中心とした”骨折の患者さん“を治療する外傷センターであることが実情です。外傷治療には多くの専門医が必要であると申し上げましたが、救急医だけでなく、様々な診療科の医師たちがチームとして治療に参加できる大学附属病院に外傷センターを併設した施設はとても少ない状態です。

自治医科大学附属病院でもこれまでは“外傷センター”という名称がなくても“救命センター”で重症の病気の患者さんも重症の怪我の患者さんも治療してきました。しかし内科の病気による患者さんと怪我の患者さんでは治療していく過程がかなり異なってきます。特により複雑で重症な怪我の患者さんを上手に治療していくためには、“救命センター”のなかでも特に“外傷治療(怪我の治療)”を専門に行う“外傷センター”が必要になってくるのです。そこで当院では、2020年から“救命センター”の中に「救命外傷センター」という部門を新たに作りました。「救命外傷センター」と”外傷センター“の大きな違いはありませんが、我々の目指す「救命外傷センター」は、大学病院だからこそ可能である様々な診療科の専門の先生たちと協力し、チームとして一般の病院では治療が難しい患者さんを救命し、できる限り後遺症を少なくし怪我の前の状態に戻っていただく（身体機能を回復する）お手伝いをすることを目標にしています。そうすることにより怪我をした人たちの早期社会復帰率を向上させることができます。つまりより早く学校や職場に復帰でき、

健康的な日常生活を送ることができ、趣味も楽しむことができる元気な体に戻れるのです。もちろん重症であればあるほど元の身体機能に戻すことは難しいのですが、より理想に近づけるために努力は続けていきたいと考えています。医療の話は専門用語が多く理解しづらいことも多いのですが、公開講座ではできる限りわかりやすい説明を心掛けたいと思います。

≪講師略歴≫

氏名	松村 福広（まつむら ともひろ）
学歴及び職歴	1993年3月 自治医科大学卒業 卒業後は香川県立中央病院整形外科や離島を中心に香川県内で義務年限を修了
2004年4月	自治医科大学整形外科 入局
2006年1月	ニュージーランド Auckland City Hospital 留学
2011年4月	自治医科大学整形外科 講師
2020年4月	自治医科大学救急医学講座 准教授
代表的著書	『骨折の保存的治療』（メディカ出版） 『小児骨折治療』（南江堂） 『偽関節の治療戦略』（メディカ出版） 『AO法 骨折治療 第3版（翻訳）』（医学書院） 『AO法 骨折治療 Foot and Ankle（翻訳）』（医学書院） 他